

日本女詩人蜂飼耳 2010 年 7 月在日本 NHK 電視台〈視點論點〉全長十分鐘的節目中，以「詩の町・花蓮」為題，對花蓮文化局舉辦的詩歌活動、松園別館，及花蓮與其詩人的介紹。

播出時間：2010 年 7 月 14 日・日本 NHK 教育台

2010 年 7 月 15 日・台灣有線電視「NHK 世界台」

〈視點論點〉

詩の町・花蓮

蜂飼耳



思いがけないきっかけに恵まれて、はじめての国や町を訪れることは、読んだことのなかった本にふと手をのばしてみる行爲と、どこか似ています。私は最近、台湾へ行きました。189

5年から終戦まで、半世紀ほどにわたって、台湾を日本が統治していたという歴史的な背景や、台湾にはいま、日本の文化に関心をもっている人たちが少なくないことなどは、知っていましたが、けれど、そうした断片的な知識やイメージは、現地へ行ってみて、はじめて、具体的な手応えのあるものとして目の前に現れてきました。



台湾の東側は、その西側と比べると、海岸線の地形がけわしいなどの理由から、開発が進むのが遅く、手つかずの状態に残されてきたところも多いそうです。アミ族やタイヤル族、ブヌン族などの先住民の人たちの居住地でもあります。花と蓮という二文字をその名にもつ町、花蓮は、台北から電車で三時間ほどの場所にあります。この町で、毎年おこなわれている詩歌のイベントに参加する目的で、去年、はじめて花蓮を訪れたのですが、実際に目にして、驚くことがいくつもありました。

たとえば、花蓮には戦前、多くの日本人が暮らしていたのですが、現在でも、当時の民家や建

物が、町のここかしこに、点々と残っているのです。いまでも使われている建物もあれば、すでに廃墟となって、ただ残されているだけのものもあります。日本人たちによって植えられた木が、そのまま生長をつづけて、いまでは実をいっぱい実らせている庭などもあります。戦前、日本人が作った防空壕なども、町のなかに残っています。戦前のいちばん多いときには、町の人口のおよそ半分が、日本人によって占められていたそうです。そんな花蓮の町には、常盤や花屋敷という名前の料亭や、タイガー、クロネコ、スズランといった名前のカフェなどもあったそうです。



そこには、日本による台湾の統治という入り組んだ歴史的背景があるわけですが、過去に日本人たちが作ったものが、現在でもそのままあちこちにあるという眺めは、その時代を生きたわけではない自分にとっても、過ぎた時間をありありと感じさせてくれる貴重な眺めです。多くのものが消え去り、流れ去って、昔のものが部分的にだけ残っているために、かえって想像をかき立てられるのかもしれない、と思います。たとえば、町の高台に位置する松園別館という建物は、旧日本軍が建てたものです。松園という名前からもわかりますが、敷地には、太い松の木がいくつも生えていて、こぢんまりした松林となっています。松の木は、日本人の手によって植えられたものだそうで、日本の風土と比べると松の木が育ちにくい土地に、あえて松の木を植えて、ふるさとを懐かしんだということのようです。戦争が終わってから、しばらく、松園別館は放置され、すっかり荒れはててしまったそうですが、現在では改装されて、町の人たちによって、イベントの会場やギャラリーとして使われています。ひとつの建物や、同じ場所が、時を経て、別のものに生まれ変わる機会を与えられることは、そこから消えた時間を見つめることでもあるように思います。消えてしまった過去と、現在に受け継がれているものとの両方を目にする機会が、花蓮の町では何度もあって、出口のない、複雑に重なる時間のなかを行ったり来たりしている気もちになりました。

花蓮は、何人もの詩人を生んでいる町でもあります。たとえば、この町に1940年に生まれた楊牧（ヤン・ムー）には『奇萊前書』（上田哲二訳、思潮社、2007・12）というタイトルの、まさに花蓮とその周辺について回想的に描いた本があります。ちなみに、奇萊とは、過去

に使われた花蓮の別名だそうです。日本統治時代、終戦、その後大陸から移ってきた国民党政権の時代へと、楊牧の『奇萊前書』には、大きく変わっていく台湾の社会状況が映し出されています。とはいえ、この本の魅力は、世の中に起こった出来事を、ただそのまま描き出しているのではなく、細部にまでわたって、ひとりの文学者の内面に照らし、こまやかに追いかけているところにあります。日本人が作った花蓮の港には、1938年3月、はじめて水が引かれたそうです。その後いくつかの作業を経て、翌年港が開かれたとのことですが、楊牧は、この港の風景を、こんなふうに書いています。「ぼくが初めて築港に言ったのは十二歳ごろの事だ。水が注ぎ込まれてから何年かたっていて、西から東へ伸びる防波堤の辺りに来た時に見えたのは、すでに昔からそこにあったかのように海浜がひろがり、かつて何年か前まで陸地の草原でやがて海水が奔流してわきあがった場所とはとても見えない」。かつては、そこになかったものが、人の手によっていったん出現すると、まるでずっと前から存在していたかのようになじんでいく、そんな眺めを、楊牧は自分の体験に引き寄せて切り取っています。



さて、花蓮が生んだ、もう一人の詩人、1954年生まれの陳黎（チェン・リー）には「花蓮港街 一九三九」という詩があります。今年の春、日本で翻訳の詩集として刊行された『華麗島の辺縁』（上田哲二訳、思潮社）にも、この詩は入っていますが、花蓮の町の具体的な地名や通りの名前が出てきて、現実の風景と深いところで結びついていて、読んでいくと、ざらりとした手応えを残します。その一節に、「どのように無数の閲覧者がいながら常に一冊のまったく新しい鏡の書であったのか？」という言葉があります。太平洋の波ばかりでなく、歴史の波もかぶりつづけてきた花蓮の町を、鋭く捉えている詩です。



ひとつの町へ行くことで、これまでもこの先も 行かない町がたくさんあることに、むしろそんな町の方が多いことに、改めて気がつきます。行くことのない場所にも、ひとりひとりの暮らしがあり、過去から未来への歴史があるのだと、想像するひとときは、立ち止まって考えたいような気持ちをもたらします。いうまでもないことですが、似たような生き方というものは

あっても、同じものは二つとしてないのだという事実が、心の中に、静かに降ってくる気持ちになります。私が台湾の花蓮という町と出会ったことは、いくつもの偶然が重なった結果かもしれませんが、そんな偶然の出会いがあるときには、受け取れるように、歩いていきたいと思いました。はじめての町を歩くことは、まだ読んだことのない本のページをめくることに似ています。そこに、新たな発見とともに、懐かしさを見出すとき、足元の道は、さらに遠くへと伸び始め、いまだ見たことのない風景が生まれてきます。

